

河川技術者のための(?)生態学

——ほんものの川を求めて——

What is Real State of Rivers ? or Ecological Thoughts for the Lotic Engineers

川那部 浩哉

Hiroya KAWANABE

まえおき

国際生態学会とやら何とやらが近日あったりして、申しわけのないことながら、とにかくここ数か月、原稿を書く時間がない。雑文を書くにも7回ほどは推敲しないと、何のことやら判らない文章が出来ると言う、まことに悲しい日本語の能力の持主だから、書けない事情を認めて頂かざるを得ない。しかし、講義集(抗議集ではないらしい)に何も書かないのは、あまりにもひどいと言われそうだから、それよりはまだまだかと、今年1990年3月3日に書いた別の原稿を、とりあえず転載しておくこととする。

実はこれは、全国水問題協議会の30年記念誌である『川、激動の三十年』に掲載するためのもので、編者は同協議会事務局長の門馬淑子さん。今年1990年中には、発行される予定と聞く。したがって万が一、引用しようなどと言う奇妙・奇特な方があれば、ぜひこの講義録ではなくて、本来そのために書いた上記の記念出版物のほうを引用したかたちにして頂きたい。

門馬さん、それにこの研修会に私を呼んで下さった、平野宗夫さんと坂本紘二さん、どうかお許し下さい。

川との付き合いの始まり

仕事の対象として、まともに川を考えようと思って歩いたのは、1955年春のことである。京都府の日本海側を、舞鶴市に流れ込む伊佐津川から始めて、西へ由良川・宮津川・野田川・世屋川・筒川・宇川・竹野川・久美浜川と通り、兵庫県に入って円山川でとりあえず打ち止めにした。アユの「放流基準」を求める4年目の調査を引き継ぐことになり、それに適当な河川を決定するためであって、同行者は2年先輩の三浦泰蔵さん、1年先輩の水原洋城さん、私とともに大学院に入った原田英司さんだった。

京都市の中央やや東寄りを流れる鴨川の岸辺に母と佇む機会は、子供のころから多かった。また旧制中学から新制高校にかけては、良く京都の北山を歩いたので、そこにある川や溪谷を見る機会があった。さらに学部の4回生になってからは、川の水棲昆虫の生活形と分布の実習で貴船川へ何度も通ったし、中でもその夏には、由良川の支流の牧川と淀川の支流の上桂川へ、水原さんのアユの調査の「手伝い」に行った。

しかし、アユの調査をするのに適当な川、それも海から天然にアユの遡上する川を選ぶとなると、川のありさまをあらためていろいろと真剣に考える必要がある。当然ながらこれは、私にとっては初めての経験であった。すなわち、かなりの思考を強いられることになったのである。

水質汚濁の問題

川の「質」について論じられていたことは幾つかある。おそらく当時も一般的に広く論じられ、いや、今でも最もよく知られているのは、水質汚濁とくに家庭下水などによる有機汚濁の問題であろう。私の周辺で言えば、奈良女子大には津田松苗さんがあって、腐水性とその生物指標の問題の日本での第1人者であった。

周知のことかと思うが、手元の『岩波生物学辞典』を見ても出ていないので(ついでながらこれは、中間編集者であった私自身の手落ちである)簡単に述べておくと、陸水とくに河川の有機汚濁の程度をいくつか

の階級に分けて示そうというのが、いわゆる腐水性体系である。貧腐水性・β中腐水性・α中腐水性・β強腐水性・α強腐水性などに分けられ、それぞれについて生物の指標種ないしは指標種の量的な組み合わせが提案されている。1971年になって環境庁から告示された「水質汚濁に係る環境基準」と、いくらか強引に対応させてみると、貧腐水性はそのAA・Aに、中腐水性はB・Cに、強腐水性はD・Eにでもあたるだろうか。この類型に例示されている魚の名まえなどは、誰が考えたのか噴飯物の極だが、それはまあここの話ではない。

以上は、いわゆる有機汚濁の話である。それも本当のところは、先に書いたように従来の家庭下水を中心に考えたもので、工場などからの異なったかたちの有機廃液は、実はこれにはなじまないところがある。毒物を典型とするその他の汚濁がこれに加わるとき様相が一変することは、今やよく知られた事実だろう。

私にとっての独善的・独断的な水質基準は、かつてどこかに書いたことがあるが、今も大きい変更の必要性を認めていない。それは、①水中眼鏡をかけて泳いでみたくなり、のどが渴けばその水をそのまま飲む気になる川、②泳いでみたきはなるが、水を飲むのは遠慮したい川、③裸足で入って生物を採集するのは我慢するが、顔を付けて観察したり泳いだりするのはいやな川、④採集も出来るだけしたくなく、やむを得ないときはゴム靴とゴム手袋を用意する川、⑤ゴム靴やゴム手袋があっても採集すらお断りしたい川、⑥川岸に佇みあるいは川の近くを通ることすら御免蒙りたい川、以上である。

しかし、まともな川、本物の川が汚濁されているのはならないことは、多くの人々にとってもはやよく知られた事実だろう。そうなら、これ以上ここでくだくだ書きつける必要はない。

蛇行する瀬と淵

アユの調査河川としては結局のところ、時間的には大学から最も遠い宇川を選んだ。この川での調査が、それから去1989年まで毎年続いていることは、あるいは知られているかもしれない。それはともかくこの川を選んだ理由は、アユがたくさん棲んでいる川だという以外にないのだが、川のほうから言えばまず、瀬と淵がともに存在すると言う必要条件を満たす川が、ここしかなかったからである。

「私どもの先輩に可児藤吉さんと言う人がいた。この人は水棲昆虫の分布を研究し、生活内容の解明を始めかけたところで戦死した人だが、分布を研究する多くの人が、1回の調査とか、せいぜい1年数回の調査で済ませていたところを、毎日のように川へ出掛け、<川の石を全部ひっくりかえした>と言われるほど徹底的な調査をした。しかも、環境条件のほうも、単に水温を測り流速を測ったのではなかった。

「川をばらばらに解きほぐしたとき、それ以上に分けられない単位として、瀬から淵までという一つながりが取り出せる。瀬は瀬あつての瀬、淵は淵あつての淵で、これを分離するともう川とは言えなくなる。川の生物分布に働く主要な要因として、水流・水温・水質・水深・底質の5つの挙げられることが多い。ところがこうした要因は互いに独立ではなく、関係しあっており、しかもどれも同様の重要性をもっているのではなくて、その中に根本的なものと副次的なものがある。川の場合根本的なものとは、川の川らしいところ、すなわち<水がともに流れている>ことであり、したがって流水を規定する川の形態だということは、誰にも異議があるまい。」

以上は1962年に書いた雑文の一部だが、引き写しのお許しを乞う。可児さんはこうして1940年代に、川の upstream には1蛇行区間に幾つもの瀬と淵があり、瀬から淵へは水は落ち込む形で流れること、中流には1蛇行区間に1つの瀬と淵があり、瀬から淵へは水は流れ込むこと、下流には同様に1蛇行区間に1つの瀬と淵があるが、その境界は必ずしも明白ではないことなどを、先ず示したのである。そして、いかなる形の瀬がどのような条件下で成立するかは、特に中流について私どもが1950年代にある傾向を見つけて分類してみた。

そもそも川は必ず蛇行する。その蛇行点には必ず淵が出来る。典型的な中流域を例にとれば、外側は多く岩盤からなって急傾斜で深く、内側は浅く傾斜は緩い。淵は浅くて砂底のところに続き、それは次いで底に石

が一面に存在する平瀬に移る。水の表面はまだ大きくは波立たない。これは次第に早瀬に変わって行く。ここでは底石は何重にも重なり、水は波立って速く流れ、ついに瀬へと入り込む。水面も底も傾斜はこの蛇行の間、次第に大きくなって行く。

蛇行しない川、瀬と瀬のない川は、実は川ではない。それは言わば、大きい溝なのである。

環境の環境と言うこと

瀬と瀬がまともに存在することがアユの棲息量に大きい意味をもつことは、1955年にすでに明らかになった。先にも挙げた雑文に従えば、「瀬は餌となる藻類の点では条件が良いが、（特に平瀬は）隠れ場・休み場としては条件が良くない。逆に瀬の方は、休み場としては大変優れているが、藻のほうは質量ともに悪い。そこで、立派な瀬があっても隣接する瀬がお粗末だと、アユは瀬の悪い方の条件である隠れ場の問題で生活が制限される。同様に立派な瀬が悪い瀬と隣接すると、瀬の餌量でこれも制限される。しかし、立派な瀬と瀬が並び会おうと、アユは昼間は瀬へ出て、夜間（あるいは逃げる時に）は瀬へ帰るという生活をして、双方の欠点を補いあい、良いほうの条件をともに生かすかたちで、この場を利用することが出来る。

「コイ科にオイカワ（関東でいうヤマベ、関西でいうハエ）・カワムツ（単にムツ・モツなどともいう）と呼ばれる同属の魚がいる。大阪学芸大学の水野信彦さん（現在は愛媛大学）と私どもの教室の名越誠さん（現在は奈良女子大学）が、この2種の生活史を比較しながら調査した。この両種は、中流域の砂底で生まれ、発育の初期には岸寄りに集まって浮遊的な生活を行い、形態の完成と共に、次第に積極的な行動様式に移り、雑食性をもつようになる。だがこうした共通面とともに、オイカワは動き回って餌を探す傾向が強く、カワムツは逆に餌を待ち受けて、それにとびつく傾向が強いという、違った面をもっている。

「こうした差異は、仔魚から稚魚へかけての時期に、空間の広さの要求として、たいへんはっきりと現れる。この時期にはまだ、遊泳力が小さいので流れの緩い場所が必要なのだが、カワムツは特に緩い場所が必要である。それが狭い場所であっても良い。ぎゃくに、オイカワは流速そのものはカワムツより幾分速くても良いが、それが広い場所で連なっていることを必要とする。ところで、上・中流域にも淀んだ瀬はたくさんあるが、それは広い面積では連なりはしない。淀んだ瀬が広がる所は、中流域下部まで来ないとな。そこでオイカワは、この時期にいったん中流域下部まで下り、もっと遊泳力が出来てから、改めてさかのぼる。」

イワナは、流れの比較的緩い底近くあるいは物陰にいて、その上の流れの速いところを通過する流下物にとびつく。近傍に流れの速いところと遅いところが存在することが、生存のための必要条件であることにについては、最近になって実証的な論文があらためて出ている。

生物にとっての環境というものは、現にその生物がいるその場所だけの環境ではなくて、その周りがどのような状態にあるかによって、異なるものである。環境の意味は、その環境の環境、つまりどういう環境の中にその環境があるかによっているものであること、実はいまさら言うまでもない。私達の生活を少々考えるだけでも、それは自明である。

一様に流れる川などと言うものは、実は川ではない。生態学現代史の幕を開いたエルトンさんの言うとおり、「秩序と不秩序とが見事に交錯しているとき、人はそこに美を感じる」のであって、それを失って恬然としているのは、まさに精神の退廃と言って良いのではなからうか。

流れの連続性

アユが一生の間に、海と川の中流域とを往復することは、よく知られている。こういう生活史を持つ魚は案外に多く、日本列島ではコイ科以外の淡水魚は、かなりのものがこれだと言っても良い。それと同時に、川の中だけで生活している言わば生粋の淡水魚も、前節で見たオイカワの例のように、狭い場所にじっとしているのではなくて、川の中を上へ下へと動き回っている。

水棲昆虫も同様である。ヒゲナガカワトビケラというのは、川の石の間にルースな巣を作り、網を張って、上流から流れて来る動植物を受けて食う種である。ところが、同じ水系の川でもこの虫の量の多い川と、極端に少ない川とがある。いろいろ調べて見ても理由が判らなかった。

「兵庫県関宮中学校の先生をしている西村登さん（現在は退職）は、水棲昆虫と言うものは、幼虫の時期だけを水中で過ごすものだから、陸上ですむ成虫の時期も調べなければ、本当のことは判らないと考えた。ヒゲナガカワトビケラは、川の上を上流へ上流へと産卵飛行する。このときメスは、水面すれすれかせいぜい30センチぐらい上を、水面の反射をたよりに飛んで行く。ところで支流の合流点に、転石が積もっていて、水がその間や下を通っているところでは、水面が上から見えなくなることがある。そうするとこの虫のメスにとっては、その分流の存在は判らないわけで、従って分流の幼虫生息量は全くなってしまふのである。」

遡上・下流というのは、川に棲む生物にとって日常茶飯事であり、これを欠くことは生活の破壊を意味すること、実はあらためて言うまでもないほどの事なのである。

さて1974年に私は、東京大学の高橋裕さん（現在は芝浦工科大学）を代表とする調査班の一員として、大分県の九重町に行った。筑後川の上流に国東半島側へ分水する猪牟田ダムなるものが計画されていて、その影響調査というのに行ったのである。私は、影響以前に、現在既にこの川がダムで見えるかげも無くなっているのに、あらためて心を痛めた。

報告書を書くにあたって、中でも少なからず困ったのは、ダムの下にあるいわゆる減水区間のことである。当時は、維持流量の問題があらためて取り沙汰されていて、この話はそれを論じる項で扱ったのであり、この問題はいまでも全く解決されていないのだが、それは今回は論じない。いま言おうとしているのはもっと単純明快なことで、減水区間を見るととき誰もがすぐに気になる何かアンバランスな感じについてである。この「感じ」が流量と底質いや河相とでも言うべきものとの間の関係から受けるものであるのは、これまたすぐに判る事実で、川のたたずまいがもっと大きい流量にびったりするのにもかかわらず、実際に見られる流量が極めて少ないということと、とりあえずは関係がある。日本列島の河川は、そもそも季節的な流量変化が、また最大流量と最小流量との違いが大きく、いわゆる流況係数の大きいのが特徴であり、それは直ちに、流量と底質との間の常なる一致をいささか欠く条件になっているのは確かである。しかし、先に書いた「何かアンバランスな感じ」と言うのは、これとはまた異なるのであって、それは例えば流況係数の極めて大きい姫川、あの日本アルプスと俗称される飛騨山脈北部の水を集めて糸魚川で日本海に注ぐ姫川と、ダム下流の減水区間を思い浮かべて貰うならば、この相異は誰にも判るはずである。

だがこれを的確に表現することは、定量的には勿論、定性的にも当時たいへん難しく、「著しい不整合」と書くのがやっとであった。いや、今も変わらず困難なことは、このもたもたした書きかたで既にお判りであろう。だがこれもまた、その川がどれほど「ほんもの」であるかを考える際には、避けて通れない大きい問題なのである。

ダム湖すなわち湛水域のことについては、水位変動が必然的であり、沿岸帯が成立せず、水の濁度が下がること、などを含めてすでに周知の事実であり、ここで改めて触れるまでもあるまい。

四万十川に遊ぶ

四万十川は、いまでは自然の残った河川として有名である。だが実は私には、ここについては話すほどのことがない。なぜなら、1979年に全国水問題協議会のシンポジウム「誇らかに語れこの四万十を」と言うのがあって、先にも名前を上げた高橋裕さんや、地元出身である島根大学の北川泉さんなどとともに、協議会事務局長の門馬淑子さんに引率されて行ったのが主な訪問で、それ以外には2回ばかり同じく数日間、川を見ただけだからである。

四万十川には、生粋の淡水魚は本来20種に満たなかった。そしていずれもその両側、すなわち仁淀川や

新莊川と言った土佐湾湾奥に流れる川や伊予水道に流れる川に棲んでいるものとは、少しずつ性質が異なっているらしい。その代わり、海と往復して生活する通し回遊魚は80種以上にも上る。アユは川口から170キロは充分に上ったらしいが、今では橋原川にダムが出来て、そこまでは上がれない。しかし、ボラ・スズキ・シマイサキ・ギンガメアジ・キチヌなどは、今も80キロは溯る。一般に海の魚は、水の暖かい所では淡水への適応が良いのだが、この川は勾配が緩いせいもあって、日本列島では最も長距離に海産魚の溯上する川として知られている。

10年あまり前、先に書いたシンポジウムに参加したときには、川を横断して鯉鱈がずらっと並んでいた。「あれは鮎鱈の間違えに相違ない」と話し合ったのを覚えているが、そのアユの観察に川へ入ったところでは、底石の間には泥がかなり溜まっていたし、腹を石に付けるとざらざらした。さらりとした上質の珪藻がびったりとついている肌触りでは全くなかったのである。「5-6メートルの竹の先に針をつけてそれで引っ掛けてアユをとったものだ」との話しも、何人かの方から聞いたが、この漁法、実際には見ることが出来なかったし、いや、底のほうを見るのではなく水面近くを横に見るやり方でも、いまでは2.5メートル先を見るのが精一杯だと、私自身思った。上流へ上って、橋原川のダムの上と下では濁りは非常に違っていたし、本流にある家地川ダムではその下流にほとんど水の流れていないのに驚いた。またそれより下流の広見川は、潜る気などとても起こらぬ川であったし、川口に近い中村では、このシンポジウムの数日前から赤潮が始めたと言った。

昨年11月に出た『日本の淡水魚』の中の「四十川川」の項によると、現在は状態がさらに悪くなっているらしい。河川「改修」による河床の平坦化、本流と支流ないし用水路との間の生物の通過障害の存在、砂利の採取、出水の減少などは、汚濁とあいまって川自体にも、統計では日本で10番目の漁業にも、大きい悪影響を与えていると言う。だが同時にこの本によれば、積極的な環境改善に向けて住民運動が力強く始まっているそうだ。以前にお目にかかった多くの方々の顔を思い浮かべながら、「子々孫々に誇り得る清流」に徐々にでも近づいて行く」ことを期待したい。

長良川の状態

一昨秋、計画以来30年以上停まっていた長良川河口堰が着工になった。私は極端な地方分権主義者だから、これ自体に賛成とか反対とか強く言う気はないが、生物に対する影響の調査が不十分なままで（いや、ひょっとするとあるのかもしれないと好意的に見ても、その調査資料が公表されていないままで）、驚くべき過小評価、いやただ一つのまとまった調査報告である『木曾三川生物資源調査団中間報告』（小泉清明編）の内容を著しく歪曲した結果をもととして、着工になったことだけには、とにかく納得しかねている。

だがそれは、また別の機会に書くこともあろう。ここでは1958年から1990年までの間に、合計僅か30日はどこの川を見た（調査したのではない。念のため）感想を、1975年に書いた雑文2つを大いに引用しながら、少々連ねる事にしたい。

「1958年小泉清明さんは、岐阜市内より出る荒田川・境川・逆川などの支流には水棲昆虫も生存せず、汚水の排水溝に過ぎぬとし、合流点より下流少なくとも左岸側も、この影響を著しく受けていると指摘」した。ところで1974年この下流で、「公害問題に深い関心を持っている東京の学生氏が、腐泥の上に藻の僅かに淀む岸にたたずんで、<下流でもきれいな川だ>とつぶやくのを聞いた。水は半透明。深さ15センチぐらいのところなら、底がまだ確かに見透せぬこともない。隅田川・多摩川よりはまだまだしな川なのだろうと、私は妙な感心のしかたをした。すなわち寒心にたえなかった。

「その2・3日あと、郡上八幡で目覚めた朝、夜来の雨に本流は濁りに濁っていた。いっぽう支流吉田川はささ濁り程度。前日に<視察>した本流源流部分の、スキー場・ゴルフ場・レジャー施設・集約農地など大規模開発のすさまじさを思い起こし、また二つの川の濁度・水量の明らかながいに、いささかならず呆れ、かつ吉田川の状態にほんものの川を見る思いであった。」「郡上漁協員いわく、<昔は支流のアユがま

ず降下し、それが本流のアユとともにしばらく生活し、そのあとともに降河した。最近では本流のアユが先に降河し、その後支流のアユが本流に滞在することなく、直接に降河する」と。吉田川より本流の、増水時の濁り甚だしく、また増水流量に比して淵の容量の著しく小さくなったこと、以上二つから来る現象を適確に表現するものである。これらすべてが、本流上流の開発等による土砂の流入と、河川<改修>工事が原因」であることに、間違えはない。

「しかしその昼、天然記念物のウナギの産地―粥川に立ち寄ったところ、私は自分の目を疑った。この川、藻類の付着状況から見ると、水量は前日の量の2倍をはるかに越えていること明白であるにもかかわらず、水はあくまでも清澄。深さ2メートル以上の淵の底まではっきりと見えた。思えば、アユの調査に京都府下の川を初めて周ったころは、かなりの雨の降り続いた後も、降り止んで一晩たてば、潜ってアユの行動を調べるにさしたる支障のない川がまだかなりあったのである。雨が降り増水すれば、水は少なくともさき濁り程度にはなるもの―こういう思い込みはじつは、もはや濁らされた眼での判断であったのだ。」すなわち、さきの東京の学生氏と全く同じ。言いかえれば、ほんものの川のすがたをすでに忘れていたのである。

「岐阜市のやや下流においては、河床の低下とそれによる砂防・水制の破壊が著しい。下流漁協員の船に便乗したが、他所者の私の眼にも明白々々である。アユの産卵場は従来は東海道線鉄橋のはるか下流であったが、<年々瀬一つずつ上流に移り>、1974年現在は忠節橋下流から菅生にかけてであると聞く。いっぽう、やや上流長良橋付近の底質は、現在一抱えの石殆どなく、したがってアユ棲息地として一等地ではない。帰洛後1958年の野帳記録を見たところ、<この付近アユ棲息地として良好>とあった。これらの変化は何のせい？ 原因にはいろいろのものがあるが、それをこうまで大きく続かせた元凶の砂利採取といわゆる河川<改修>にあること、これはまずまず確実である。

「<改修>とは立派な言葉だ。しかしその<改修>とは、水を可及的に早く海へ流すことのみを目的としている。曲流し蛇行しながら瀬と淵を作って来た川を、直線化しただらだと流れる同じ傾斜の続く川に、いや溝にせしめようとのこの最近の工事方式。水の流れをなだめるための水制なんぞという工法は<古い>として捨てられ、水は流れるのではなく流されるかたちとなったのだ。長良川はこの点でも隅田川・多摩川・淀川よりはまだまだしに違いない。しかしこうした<改修>工事は方々で進行中。また二重に堤防があり、中間が洪水時の遊水地となっていた場所は、内側堤のかさ上げを理由にすでに宅地化されはじめている。洪水時の河積増大を第一の名目にされている長良川河口堰の<目標>とはまったく逆に、河積はわざわざ縮小されて行く。」

1975年の<視察>は、当時一橋大学学長であった都留重人さんを代表とする環境・国内診断調査団について行ったものだが、この団員で源流まで同行して下さった四手井綱英さん（当時京都大学）は、「植生伐採・地表流増加・地表土流失・洪水量増加・河道上昇・渇水時異常減水の悪循環を引き起こす、水源地域開発行為の規制強化」を提言している。白鳥町あたりまでは私もその後も何回か行っていたが、蛭ガ野高原までは1990年1月、日本自然保護協会河川問題特別委員会の面々とともに、15年ぶりで上がってみた。雪が積もっていたのは勿論ながら、当日は快晴で全体が見渡せ、規制などは棄にしたいその開発のすさまじさに、委員一同<感嘆>の声を挙げた。

「治水とは何よりも、流域全体を保全し、上流から下流まで川の性質を保ちながら水を流れさせ、水を涵養することであろう。片々たる河口堰によって治水を代行させようとの考えは、水資源開発公団がそれを真実信じていようと、単にカモフラージュのために言うのであろうと、長良川本来の治水からことをそらせる結果になるように思えてならない。」

以前の雑文を引用しているあいだに、意見めいたことを再録してしまった。だんだん興奮して来て、何を書き出すか判らなくなりそうである。ここらあたりで今回は筆を措こう。

おわりに

高橋裕さんは、その著『利根川物語』に次のように書いている。「自然が作った川の道は、自然の地形勾配にそってもっとも無理のない川筋をえらんで流れている。曲がりくねった流路をまっすぐにしたり、本流をつけかえたり、われわれは洪水からまぬがれようとして、いろいろな技術手段をおこなってきたが、大洪水のときには、旧河道を復元させつつ、氾濫することがしばしばみられる。この約一世紀のあいだに、私たちはせっせと頑丈な高い堤防をきずき、けんめいに治水にはげんで来た。おかげで洪水はいままでのようには遊ばず、いっきに河道へ走り、雨どいのようにまっすぐになった河道を、ひた走りに河口めがけてつきすすむようになった。こうして、治水工事を熱心におこなった川ほど、洪水流量が増大するという結果になった。明治以来の治水方針によって、豪雨の量は同じ程度であっても、洪水流量ははるかに大きくなって来たことはまちがいない。」

2年まえ私はある雑文の中に、以上のように引用しておいた。この著名な河川工学者のこの本での主張を素直に延長して行くと、長良川河口堰などは要らないことになる筈と思うのだが、これは僻目であろうか。それはともかく、私はこの雑文の最後を次のように締めくくっておいた。今回もそれを再録しておこう。

「＜わたしは史料を調べて見て、其中に窺はれる自然を尊重する念を発した＞とは、誰もが知るとおり、森嶋外さんの『歴史其儘と歴史離れ』の一節である。河川のあるべき姿を考えるのに、この＜自然を尊重する念＞を離れては成り立ち得ない。この念はわれわれの眼から恣意の雲をはらうであろう。もっともこの念さえあれば、かならずもっとも近似的な＜自然＞を考えることが出来るだろうなどと、御方便な約束は与えられていない。ただこれなくしては、川について考え、そのうえに立って行った物事の全体は空虚な、すくなくとも脆弱なものでしかあるまい。いやこれなくしては、われわれ自身を破壊する以外のものにはならない。」

ほんものの川を求めることは、私たちの物質生活と精神生活とを正しく進めるための、必要不可欠な作業のひとつなのである。
(1990年3月3日記)

あとがき

8月6日の当日はできるだけ、以上に書いたこととは違う話題を提供するよう、努力するつもりである。ただし、これは約束ではないので、守れるかどうかはまた別のはなしである。

他の方々の「御講義」を聞いて、それを種にしてお話しをすることは、今回のスケジュールではご覧のとおり不可能である。いや、数年前にある小さな国際シンポジウムである人が、その直前までに話したすべての人からスライドを1つずつ借りて、それだけを使って自分の話を組み立てたのを見てから、私のやりかたにいくらか自信をなくしたこともあるので、今回の日程は却って有り難いとも言える。

出来ることなら3日間ずっと、講師のかたがたのお話だけではなく聴衆のかたがたの質問や反応を見聞きして、私自身の勉強にもさせて頂きたいと思っているのだが、それが許されるかどうか。これまた、突発的なことが私の日程上に生じる可能性があって、あまり自信はない。